

令和5年度第3回市民協働活動審査会 要録

日時:令和5年9月25日(月) 13:30~14:20

場所:郡上市産業プラザ 4階 交流ホール

出席者:審査委員

笠野信男、武藤里恵、乾松幸、上村英二、青木修、三輪幸司
事務局

三島政策推進課長、木嶋課長補佐、荒川係長、牧野主任

欠席者:なし

傍聴者:なし

(13:30)

1. 開会

事務局 審査に先立ち、郡上市市民協働活動審査会設置要綱第6条第3項に、審査会は、委員の過半数の出席がなければ、会議を開くことができないとある。委員6名全員出席であるため、過半数を超え、この審査会は成立することを報告する。

2. 開会挨拶

(会長より挨拶)

3. 審査会進行・審査資料に関する説明

(事務局より進行、審査方法等について説明)

4. 魅力ある地域づくり推進事業補助金交付申請に関する審査

(進行を会長に交代)

「魅力ある地域づくり推進事業補助金 課題解決部門」

石徹白地区地域づくり協議会

事務局 審査会進行についての説明(説明及び事前質問回答10分、質疑応答15分)

申請者 自己紹介と事業について説明

コンセプトにあるように、子どもたちの「興味の先にある生きるための力を育む」ということで、テーマの食と遊びを通して、自分自身や他のいのちに関心を寄せる探求型学習活動を実施する。

具体的には、石徹白内でテント・トイレを子どもたちで全部作って、そこで夏から育てた冬野菜を調理して、1泊2日のキャンプを実施する。

今回、なぜキャンプにしたのかというと、1年目に食育菜園をしていた時に、子どもたちに何をしたいと聞いた。カメラ好きな子はみんなで山登って写真を撮りたい、自転車が好きな子はみんなでサイクリング旅に出たいなどあったが、みんなで共通したのは、キャンプをしたいというものであった。何故かと聞いたら、1年目でできなかった自分で釣った魚でご飯を作ったり、あとは火を起こすことに興味を持ったりなど、みんなで1日遊んで自分たちで過ごしてみたいということに挑戦してみたいということであった。

スケジュールは、10月の初旬から子どもたちと、何をどこまでどのように自分たちで作るのかということ話し合いながら準備をしたい。

今後の展望と事業効果は、1年目の事業を行って、子どもたちはみんなで何かをすること、自分たちが手で触れたり、思ったり、遊びみたいなどころにすぐ達成感を覚えている。それをより朝から晩まで自分たちで自然の中で、遊びも含めて過ごすことをやってみたいというところが高まっているので、これができるということが一番肯定的な体験として残るのが一番の効果だと思っている。

事前質問・回答

①前年度にも補助申請を行い、採択を受けている事業と類似しており、かつ継続的な事業ともお見受けしますが、なぜ、この時期の申請となったのでしょうか。

申請者 夏だと虫も多いので、涼しくなった秋がよいというのもあって、今回この時期に申請した。

②前年度の実績から今年度の事業を計画した経緯をご説明ください。また、前年度の実績と今回の申請内容にかい離はないでしょうか。

申請者 今年は石徹白地区地域づくり協議会が借りていた土地でガーデンを作っていたが、その家を来年度の親子山村留学の家にしたので、ガーデン自体での活動が継続的にできなくなったこともあって、活動内容が多少変わっている。

かい離とあるが、みんなで何をしたいかという中で、キャンプをしたいという形になったのが今回の事業になる。

③「食を通じて美しさや、ほかのいのちの繋がりを学ぶ体験や、誰かに助けをもらいながら、「食べる」「遊ぶ」という経験」とあるが、それがキャンプとどのように繋がるのかご説明ください。

申請者 キャンプでの食事を作る体験や食材を調達する体験や寝るところを準備する体験など、すべて自分たちでする中で、食べる、学ぶ、遊ぶことが、食を通じて美しさやほかのいのちのつながりを学ぶ体験なる。自分たちで作っている野菜だけでは、牛

乳やバターを買わなければならない。肉も子どもたちが狩猟できるわけではないところで、ならばそれをどのように調達するのか、どの場所からどのように命をいただいてもらうのかということを想像する機会というのは、自分たちがその食事を家で与えられて、普通に「いただきます」をし、食べるだけでなく、自分たちが今日の夜ご飯をどのようにするのか、日常の中から考え始めたり、思い始めたりするので、そこにこのキャンプが繋がっていく。

キャンプに繋がるというのは、キャンプの中で、そのような体験ができると思っている。

④事前に子どもたちにヒアリングをしたとありますが、聴き取り方法と、聴き取り人数を教えてください。

申請者 ヒアリングを放課後や休日、5人から8人ぐらいの子どもたちが、集まったところで行った。

その時に、去年はガーデンで食べ物を育てて料理して食べたが、今年は何をやるかというのを4月ぐらいに質問したところ、その中でキャンプをしたいということがあった。

⑤1泊2日のキャンプを行うとのことですが、子どもたちのニーズにはそのようなことがないようですが、なぜキャンプを行うのかご説明ください。

申請者 ニーズについては、子どもたちからヒアリングを行い、実際にキャンプをしたいという言葉があった。

⑥キャンプを行うとして、場所はどこで行うのでしょうか。また、冬に近づく季節だが防寒に備えていますでしょうか。加えて火気を使用するのかご説明ください。

申請者 場所は石徹白保育園の園長から耕作放棄された場所を借りることを考えている。そこは子どもたちも保育園の時から、サツマイモなどを植えている畑でもあったりするので、その上でやる感じになる。

火気は使用する予定である。

⑦「石徹白の子どもたちが食べ物を育て、収穫し、調理し、食べる」とありますが、2カ月の間に食べ物を育てるということですか。

申請者 すでにサツマイモ、じゃがいも、白菜は子どもたちと一緒に育てている。それ以外の食材は、調達、買い出しが必要と思っている。

⑧事業効果の内容が、前年度の「食育菜園」の内容のままで見受けられます。しかしながら、前年度事業と異なる事業を計画されていますが、同様の効果を得られるのでしょうか。また、前年度

実施事業と同じ効果を狙うということは、前年度の事業は不十分だったということではないのでしょうか。

申請者 一つの目的に対して、いろいろなアプローチがあってもよいと思っている。例えば移住者を増やすにあたって山村留学をしているが、そのやり方を変えたからといって山村留学のやり方が悪かったのかということでもないと思うし、いろいろな方法があってそれが実現されたというのと同じように、今回の子どもたちの活動の中で事業効果を目指す上で現状の子どもたちの興味関心や目指している方向性に合ったテーマを選ぶ中で、方法が変わっていく。これからも変わり続けていくと思う。

⑨コンポストトイレのキットを購入し、トイレづくりをする理由をご説明ください。

一度限りのトイレになるのでしょうか。継続的な利用ができるものであるなら、備品と同様に考え、対象外経費とさせていただきます。

申請者 キャンプ場にトイレがないため、トイレを用意する。

継続利用は難しいと考えている。理由は、トイレをどのように、どこに設置するのか、あと目隠しするための施設など、その管理を誰がするのかという時に、継続的に使用することが難しい。また、継続的な利用を目的とするとかなり費用が高くなる。安くても6万、7万ぐらいかかってしまう。

⑩食材費は参加者の自己負担で行うべきではないでしょうか。

申請者 自己負担しか駄目だということであれば、自己負担で実施する。

⑪前年度計画書中にある今後の展望では、「子どもレストラン」をすると書いてありましたが、それはどのようになったのかご説明ください。

申請者 子どもレストランは、いろんな命を育てそれを共有したいという子どもたちが増えて、子どもレストランをやるということが理想であった。実際に子どもたちがレストランをしたり、野菜をコミュニティーセンターで売ればよいという意見が出た。ただ、実行できなかった理由は、そのお金を作るためにということだった。子どもたちからみんなで遊ぶボールやトランプ、料理をする器具はこちらが負担しているのは子どもたちがみんな知っていて、こちらにお金がないから、得た利益で遊ぶボールなど何か好きなものを買って、遊べば一番よいのではという意見が出た。

それが理由なのはこちらとしても如何なものかという気持ちがあった。それを子どもたちの中で、深掘りしたり、展開したりできたらよかったが、そこまで自分が寄り添って実現するというところまで余裕がなかった。これは、思いを共有したり、感謝をしたり、自分たちの育てた野菜を届けたいなど、そのような思いが出てきた時にすればよいと思っている。

ただ言えるのは、確実に昨年度の活動で子どもたちがしたいという種が蒔かれ

ていて、芽吹いているというのは実感しているので、芽に水をやって育む周りの大人に余裕があれば、それもできていくと考えている。

質疑応答

委員① 将来的にコンポストで完熟堆肥みたいな堆肥を作って、子どもたちなりの循環型の野菜づくりをするのか。レストランで育てた野菜などを何らかの形で商品なり販売をするということによって、自分たちの財源も確保するという流れとして理解してよいか。

申請者 子どもたちはそこまでイメージができています。去年菜園で作っていた時にも堆肥場も作っていた。子どもたちがじゃがいもやサツマイモなど夏野菜を取った時も片付けする時も、そこに置いて、それに土をかけて、その結果を見ていたりする。今回もコンポストイレになるが、実際にその循環を見て、次の命を育むところも子どもたちは意識し始めているので、この堆肥で野菜がより良くなったみたいなことが実感できたらと思っている。

委員① これは最終的には子どもたちの居場所づくりと、活動場所づくりを親世代なり大人世代が支援して、できれば自立的に暮らせるような力を育てていきたいというのが、最終的な目標か。

申請者 その通りである。
やはり保育園や大人たちがそこに関わって、子どもたちを手伝うものがどんどん生まれてきたらよいと思う。

そのためにはどのようにしたらよいのかは、いろいろ試行錯誤しているが、放課後で子どもたちが遊んでいるのを見る時に、大人が関わるのはなかなかないが、キャンプをするなど大人の関わりやすいイベントや機会を作ることによって増えていったらいいし、子どもたちが例えば白菜で何か作ると言った時に、大人たちは餅つきをしようなど、子どもと大人が一緒になっていくと、大人が子どもたちの居場所作りや活動を支援するなど、活動が育っていく。そのようになれば、自立的になっていくと思うので、それを目指すべきところである。

委員① 1泊2日のキャンプ以外は農園で野菜を作ったりする活動がある。雨が降った時にはここに集まって、冬の雪がたくさん積もった時にはここに集まるなど、子どもたちだけで自治的にその集団を維持していくようにするのか。そのためにいろいろな約束事を作ったり、協力して何かをしたりというようなことまで想定をしているのか。

申請者 それは 1 年目の時は想定していて、子どもたちの居場所づくりということを題目に場所を決めたり、その場所を育んだりすることが理想と思うが、今はできてない。石徹白の場合、場所や人がいないので、それをどのように実現していくかは、流動的になる。

 こちらの家に遊びに来ているだけで、家の前にあるテーブルと椅子の周りで鬼ごっこしたり遊んだり虫をとったりをしているが、家の中でボードゲームをする、トランプをする、絵を書く、雨の日になったら家でするし、それ以外に学校で遊んだり、友達と遊んだりする。

 そのように、日によって流動的なので、放課後児童クラブのように、この場所がそのような場所であると決めるのは、今の段階では難しい。

委員② 石徹白に放課後児童クラブがないと言ったが、開設に向けた動きはあるのか。場所と支援員を確保する問題があるが、それができれば継続できていく。

申請者 子どもたちの親の中からそのようなことは具体的には聞いていない。

 地域人材がいなし、やる気がある人が多いだろうが、子どもの親も石徹白で生きていくということに非常にハードルが高いので、そこまでの余裕がどこまであるというのは分からない。

5. 閉会

事務局 以上をもって、令和 5 年度第 3 回郡上市市民協働活動審査会を閉会する。

(14:20)